



時には動物を見ながら

小松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

毎年の夏、県外の大学に出向き行う2日間の集中講義を楽しみの一つにしてきた。若者のエネルギーと向き合うのがいいし、学生が動物園をどう捉えているかに興味もある。

講座は「動物園学」。人と動物の関わりや動物園の歴史、動物保全学、飼育展示と教育、動物園経営など、動物園のオムニバスな総合解説だ。対象者は農学部動物科学専攻の学生、講義終了後に課した今年の小論文テーマは「あなたの動物園経営」とした。動物科学専攻の学生らしく、動物園の存在意義や大事な役割に多くの学生が動物や自然を知り、学ぶ場を挙げていた。動物園人としてうれしかったが、改めて動物園の存在を考える機会になった。

自然との距離が遠くなりがちな現代、動物園は都市にいながら世界の動物との出会いを通し、野生や自然に思いを広げられるユニークな場だ。私たちは自然や生き物から多くを学んで来たように、自然を切り取ったような動物園の動物からの様々な発見も楽しむ。客観的科学的な視点と人間的な心情、審美の感覚が融合し、同じいのちに親近感を抱き、時には人間も動物であることを思い出したりもする。

動物の生立ち、今の生き方に関心を持ち見てゆくと、その先に動物と自然の関係、いのちのつながり、生態系へとイメージが膨らむ。何気なく見ている動物の姿形、営みについてその意味を考えると不思議さや神秘性を感じる。自然物である人間も重ね、「いのち」や「生きる」

ことを考えてみると、動物も人も共に尊い存在だと改めて思う。まずは、動物への直感的な不思議さや面白さ発見からだ。

今年7月、大森山で13年ぶりにキリンに赤ちゃんが生まれた。背高のつぼの生立ちにはまだ謎が多い。大昔、地球の乾燥化が進み、森の消失縮小が起きたが、森内に棲んでいた大昔のキリンは、それに耐え生き抜いた動物の一種だ。大昔のキリンは森内の背の低い枝葉を食べ生きていたから、現存するオカピのように背が低かったようだ。しかし、森がなくなり森外の生活を余儀なくされた時、高木に餌を求めざるを得なかった。背高のつぼを生んだのは、逆境に耐えて生き続けようとした力だったのだろう。

キリンの生き抜く力の一端を出産時の巧妙さの中に感じた。背の高いキリンの出産は何と立ったままだ。産道高は約2m、子はその高さから直に地面に産み落とされるのではない。まず前脚が出て、次にそれに頭を載せ出て来る。身体の方が娩出される頃には前脚が地面に届くくらいになっている。子はジャポツという羊水流出音とともに地面に落とされる。衝撃を抑える子への安全配慮だ。さらに立ち上がった時の子キリンの頭高が産道高とほぼ同じ2mくらいだ。いのちをつなぐ仕掛けの絶妙さには驚かされる。生きる知恵だろう。

子キリン誕生時の角の成長も神秘的だ。鹿や牛と違いキリンの角は頭のでっぺんの骨が盛り上がったものだ。出産の邪魔になるのだろう、

角発生部には茶色の毛しかなく、中身（骨）はまだないが、鹿や牛と比べ早く、生後すぐ成長を始める。生後約10日で角は外から良く分かるし、触ると硬い骨を感じる。成長のタイミングは絶妙だ。大人キリンは角を闘争などで使うが、子キリンでの角の存在理由はどこか謎めいている。

キリンの姿形や営みなどほんの断片的な紹介だが、自然と共にある全ての動物の形、つくり、動き、営み、ことごとく神秘的で不思議な存在だ。見るほど、知るほど驚かさされ、気高ささえ感じる。自然が与えた生きるための仕掛けだ。

動物（生き物）を包み込む自然環境はたえず変化し続けているから、動物は生き続けるためその変化に合わせてきた。自然環境への適応は自然史的な尺度のことだが、キリンなど今生きている全ての動物は、様々な変化を切り抜け強かに生き続けてきた証とも言える存在だ。

動物絶滅が話題に上ることが多くなった現代だ。種絶滅の大きな要因の一つは、人間活動も影響した自然環境破壊などの変化である。動物（生き物）が生きにくいことは人間にも同じことが言える。環境変化に上手く適応できない動物はやがて生きる力が衰え、絶えてしまう。

食肉目の中に特異な動物群であるクマの仲間がいる。地球規模の気候変動で食肉の生理を持ちながら植物食に舵を切った異端児的な動物群であり、厳しい生き方をしている。その一種が、秋田の動物園にはいないがジャイアントパンダだ。パンダは一時の環境変化で得た食、竹や筍に心酔したのか、肉食動物なのに竹など植物だけに頼り過ぎ、ギリギリの栄養状態で生きてきたのだ。生き方を袋小路に迷入させてしまったクマだ。食や生活の多様性が乏し

く、森林環境の変化にともなった竹の植生変化に対応できないなど、絶滅危機の高い動物になった。

同じクマ科のツキノワグマも世界的には危機的動物種に指定されているが、日本では人との事故が増えるなど問題視されている。そのツキノワグマはパンダとは異なり食性の柔軟さ、強かさで生き抜いている。時には家畜を襲うなど、パンダの生きる力との差は歴然だ。

強かに生きるとは環境変化に柔軟に対応することができる多様な生き方、ポテンシャルを備えていることだ。多様な自然環境に生活圏を広げる力は、多様な生き方ができることだ。そんな動物の代表がネズミ類、哺乳類全種の約半分の約2,500種にも分化するなど、実に強かだ。

同じように柔軟に生きてきた仲間が私たち人間も含めたサル類だ。哺乳類史上、初めて樹上に生活圏を求めるなど新発想での挑戦心を燃やし続け、生きてきた。他動物が経験しなかった三次元空間の森で厳しい生活環境を克服し、自分達の生活領域を専有した。それが高度な生き方に結びついている。サル類の特異な姿、手足のつくり、顔と表情、行動を見ればよくわかる。生き残るため、受け身ではなく自らの力で自然を活かす能力を蓄積した。人間には長い歴史で獲得、蓄積してきたそんな経験値、DNAが全て引き継がれているのかもしれない。

動物たちの珍奇とも見える姿形や営み、よく見ると実に不思議だが、その存在を深掘りし考えてみると実に面白い。サイエンスにこだわらず直感的に感じる「どうして？」という面白さ、野生に広がるロマンも感じながら動物を見て欲しい。動物園は面白い学びの場だ。生きるための知恵が発見できるかもしれない。